



1 ^{かてから}嘉手苺のヌチシズジガマ



ヌチシズジガマは、メーステイラ、ナカステイラ、クシヌステイラといわれる3つの壕口に分かれています。中では1つにつながり全長約200mあります。沖縄戦当時、メーステイラには嘉手苺の住民が160人余り、ナカステイラには郵便局員や伊波集落の住民、クシヌステイラには伊波の住民50人ほどが避難していました。

2 ^{そなん じんちこう}楚南の陣地壕



1944(昭和19)年8月以降、楚南に駐留していた日本軍(山部隊)が構築したと言われ、米軍上陸後、日本軍は島尻に移動したため、楚南の住民等が避難に利用しました。場所は楚南の山深い谷間にあり、周囲は草木が生い茂り、わずかに穴が確認できます。

3 ^{こがん じゅうざ}護岸の銃座(川田～前原)



川田集落から前原集落の中城湾に面した護岸に多数の銃座(ライフルピット)が構築されています。この銃座は、1944(昭和19)年頃に旧日本軍第24師団歩兵第89連隊山部隊によって構築されたものといわれています。

去る大戦では、米軍が西海岸から上陸したため、結局この銃座からは、一発の弾丸も撃たれませんでした。護岸の銃座は、約115基確認されていますが、護岸改修工事に伴い徐々に少なくなっています。

4 ^{ぐしかわ}具志川グスクの壕



具志川グスクの麓に位置し、戦時中は主に近隣の住民の避難場所として利用されました。米軍上陸後、グスクの西側端の壕には、南部へ移動した日本軍から手榴弾を2個ずつ渡されたムラの青年男女が立てこもっていました。

昭和20年4月4日、23人の学徒・青年で構成する警防団は、侵攻してきた米軍と手榴弾で応戦しましたが、最後は残った手榴弾で「自決」、13人が死に至りました。

5 ^{ひだん}比殿ワイトウイの壕



比殿農道は通称ワイトウイと呼ばれ、昭和7年(1932)から10年にかけて、住民の労力によって開通したと伝えられています。その長さは150m。沖縄戦当時、通路の壁面には多くの壕が掘り込まれ、一帯の山林を含め平安名住民の避難場所となりました。現在、壁面には7個ほどの壕が確認できます。